

途上国支援 「国際保健」の人材育成を

この春、長崎大学に国際保健の専門家育てるコースができた。松山章子さんも設立にかかわった。志やお金だけでは実現できない、本場に役立つ途上国支援をめざしている。

保健の仕事だ。関係する学問分野が多く、専門家も様々なかわり方をする。

カへ何度も出張した。

落とす子どもは1年で180万人。それが私たちの住む世界の現実だ。

四半世紀前、フィリピンのスラムで過ごした1年間が、私をこの仕事に向かわせた。「怖い」と思っていた住人は実に陽気で、世の中を見通す目を持っていて、異質な人たちを排除しないコミュニティが成立している、新鮮だった。

口補水塩の作り方も、彼女の死の後ろにある、社会の底辺にいる人たちがさらされていく政治的、経済的構造もよく知らなかった。

今年4月。以前は欧米にしかなかった国際保健を本格的に学ぶ場が長崎大にできた。「国際健康開発研究科」である。国連や国際機関で働くためには「必須」の公衆衛生学修士(MPH)という学位を、国際保健に特化して取得できる。

1期生は女性10人、男性1人。看護師や、社会福祉、農業の専門家や、半数が青年海外協力隊での活動経験を持つ。「国際協力を体系的に勉強したい」と集まった。彼らは1年次に3週間、2年次に8カ月間、途上国で研修を積み、これは画期的な取り組みだ。

国内では長崎大にしかない「熱帯医学研究所」(67年設立)もフル回転する。長崎から育つことを楽しみにしている。

途上国の子どもは、感染性下痢症による脱水で死んでしまう。医者にかかれなくても、水に塩と砂糖を混ぜて作る経口補水塩で防げるのだが、知られていない。下痢による脱水で命を



松山 章子 長崎大准教授



59年生まれ。米ジョージア州ホプキンス大学大学院で博士号。国際協力の多くの現場を経て長崎大に。新設の国際健康開発研究科で母子保健と社会調査を教えている。

そんなある日、顔見知りの女の子がゴボゴボと黄褐色のものを吐いた。数日後、その子は引き抜かれた野の花が熱帯の太陽のもとで干からびるように、あっけなく死んでしまった。栄養失調と下痢による脱水が原因だった。当時の私は経

路にいた。私はこの仕事に向かわせた。「怖い」と思っていた住人は実に陽気で、世の中を見通す目を持っていて、異質な人たちを排除しないコミュニティが成立している、新鮮だった。

必要なのは学部横断で教える側力を結集するためだ。途上国の健康問題は、現状分析にしても解決策の考案にしても、学際的な知識が必要になるからだ。エイズ予防に Condom

を配ろうとしても、女性は夫が殴るからと怖くて言い出せない。これはジェンダーの問題。マラリア予防の蚊帳を売ってしまわず使ってもらうには、行動科学や人類学の知見が役立つといった具合だ。

世界の人々が健康を享受し、より多くの選択肢を有し、個人でも集団でも潜在能力を発揮できるように。そんな社会づくりのため、自分の頭と体で考え、現地の人々と共に働く人材が、

学際的な知識が援助の質高める